

モダリティ形式化した思考動詞の機能 -思考する自己の客体化-

木下りか

武庫川女子大学

kishita@mukogawa-u.ac.jp

1. はじめに

引用節を伴う「思う」は、文末・ル形でモダリティ形式化し、思考が発話時の話者のものであることを表す（中右 1979, 1994、仁田 1991 など）。

(1) 私はこの料理のほうがおいしいと思う。（発話時の話者の思考）

(2) *太郎はこの料理のほうがおいしいと思う。（他者の思考）

本発表は、モダリティ形式化した「と思う」を考察対象とし、その特徴を記述する。

2. 先行研究

「と思う」についての先行研究には、森山(1992)、Yokomizo(1998)、宮崎(1999, 2001)、高橋(2003, 2009)、湯本(2004)、小野(2005)などがある。中でも森山(1992)は、「と思う」の多義性を指摘した重要な論考である。森山(1992)によれば、「と思う」は「個人情報の表示」という意味を持ち、文脈の影響を受けて次の二つの用法が派生する。

(3) 「不確実表示用法」：例：明日は晴れると思う。

情報に共有可能性がある（客観的な）場合に「個人的な情報として提示することは、不確実であるということを表す」（p. 113）

(4) 「主観明示用法」：例：乾杯したいと思います。

情報に共有可能性がない（主観的な）場合に「個人的・主観的なものであることを敢えて明らかにする」（p. 113）

この記述に対しては、意味拡張の仕組みの説明についてなど、問題点が指摘されている。たとえば湯本(2004: 159)は、「自分自身の欲求「～したい」と重ねて主張することは、主張の緩和とはならず、主張の強調となってしまうのではないだろうか」と述べている。

他の先行研究についても同様に、検討の余地が残されている。

3. 思考主体の客体化

3.1 思考主体の客体化とは

本発表は「と思う」の意味を(5)のように考える。ここで言う「思考主体」と「主体的／客体的」は、それぞれ(6)(8)のように定義される。

- (5) と思う：引用節の場で主体的に把握されている思考主体を、主節の場でより客体的(Langacker 2006 など)に捉えなおす。(「思考主体の客体化」)
- (6) 思考主体：「思考内容」を構成する主体(例(7)の「私」)。「思考内容」とは、引用節で示される内容のことを言う(例(7)の「太郎は合格するかもしれない」)。
- (7) 太郎は合格するかもしれないと思います。
- (8) 主体的／客体的：ステージ・モデル(stage model: Langacker 1991 など—舞台を比喻とした知覚・認識のモデル)において、「思考主体」がオン・ステージ(onstage: 舞台上)になくオフ・ステージ(offstage: 舞台外／袖)に降りており、非明示／非意識的に捉えられていること。「主体的」度合いが強い場合「思考主体」の存在は、当然視されて描かれない(言語表現化されない)。しかし「思考主体」が注目(profile)され、「思考内容」を思考する主体が誰かが明示されると「思考主体」は舞台上で一定の役割を果たすことになり「主体的」度合いは弱まる(客体化する)。

「思考主体の客体化」を例(7)について見れば次のようになる。まず引用節の場で「思考内容(太郎が合格するかもしれない)」を構成する「思考主体」は、主体的に把握されている(発話時の話者の認識であることが当然視されている)。これが「と思う」によって客体化されると、その存在が概念化される。

ただし「と思う」はモダリティ形式化している(発話時の話者の思考しか表せない)。つまり、「と思う」を加えても「思考主体」が話者であることに変わりはない。したがって、モダリティ形式化した「と思う」は、(9)のように、自己の分裂的な把握を表すことになる。

- (9) 話者が「思考主体」である自己を認知的に分裂して捉えること(self-split: 池上 2012)。

3.2 客体化と引用文

「客体化」は引用文の特徴でもある。砂川(1987)は典型的な引用文について、「もとの文の発言の場と当の引用文の発言の場という二つの場の、前者を後者の中に入れ子型に取り込むという形の二重性によって成り立っている文」(下線は引用者)と述べている。実際、「と思う」の思考内容は、発話時と同時に得られたものであってはならない(宮崎 2001)。この事実は、引用節と主節の場とが同時には成立しないこと、すなわち引用節の内容(思考内容)が客体化されていることを示していると考えられる。

- (10) *あ！おいしいと思う。(cf. おいしいと思う。)

4. 思考主体の客体化と多義化

「と思う」の「思考主体の客体化」機能は、引用節の場における「思考主体」の把握の仕方（4.1節のⅠ、Ⅱ）によって異なる形で作用し、意味①と意味②を実現させる。

(11) (Ⅰの場合) 意味①：〈思考内容の〉〈私的所有（非共有の可能性）表示〉

(Ⅱの場合) 意味②：〈話者自身の願望／意志の〉〈客体化〉

4.1 引用節の場における主体把握の仕方の相違

Ⅰ：「思考主体」が「主体的」に把握され、主体が話者であることが非意識的な場合：

「思考主体」は言語化できない。

(12) 太郎は合格するかもしれません。⇒*私は太郎は（が）合格するかもしれません。

(13) 明日は晴れます。⇒*私は明日は（が）晴れます。

Ⅱ：「思考主体」が誰かは特定されていないが、願望／意志の持ち主として「思考内容」と関連付けられている場合：「思考主体」は言語化可能であるが、その内容にアクセスして述べられるのは話者だけであるため、実際に言語化可能なのは「私（話者）」に限定されている。

(14) 東京へ行きたい。⇒私は東京へ行きたい。（思考主体（私＝願望主）を言語化できる）

4.2 二種類の客体化

「と思う」は、引用節の場における「思考主体」の捉え方の相違に応じて多義化する。

4.2.1 〈思考内容の〉〈私的所有（非共有の可能性）表示〉

Ⅰの場合、「と思う」は〈思考内容の〉〈私的所有（非共有の可能性）表示〉する。

(15) 引用節の場：太郎君なら合格するかもしれない⇒主体的把握

(16) 主節の場：太郎君なら合格するかもしれないと思います。⇒客体化

客体化によって、「思考主体」が話者であることが明示的・意識的に捉えられる（自己の分裂的把握）。話者なりの思考であること（情報の非共有の可能性（言い切れなさ））が示される。

① 相手を説得するような場面では使いにくい。

(17) 大丈夫。太郎君なら自分で問題を解決しているかもしれませんよ。

(18) ?大丈夫。太郎君なら自分で問題を解決しているかもしれないと思いますよ。

② 一方的に述べ立てるべき文脈では使いにくい。

(19) 当然社長が参列して弔意を表すべきです。（葬儀・社葬の行い方 BCCWJ より）

(20) #当然社長が参列して弔意を表すべきだと思います。

③ 本来、確言が困難な事柄について述べる場合、思い込みの強さを軽減する。

(21) 太郎は合格します。（思い込みの強さ）(22) 太郎は合格すると思います。

④ 確言が可能な事柄について述べる場合、不確実性が生じる。

(23) 太郎は部屋にいます。（確実） (24) 太郎は部屋にいると思います。（不確実性）¹⁾

4.2.2 〈話者自身の願望／意志の〉〈客体化〉

Ⅱの場合、「と思う」は〈話者自身の願望／意志の〉〈客体化〉を表す。

(25) 引用節の場：大学に進学したい⇒「思考内容」に接触可能なのは話者のみ。

(26) 主節の場：大学に進学したいと思います。⇒客体化

引用節の場における「思考主体（願望主など）」が主節の場で、話者から見て客体的に把握されると、話者が願望／意志の持ち主である自分自身を客体的に捉えることになる（自己分裂的把握）。冷静さが示され、公的な場にふさわしい発話となる。

5. おわりに

「と思う」は引用節内の「思考主体」を客体化する機能を持つ。この客体化機能は、引用節内の「思考主体」のタイプの相違に応じ、多義的な意味の相違となって実現する。

注 1)これを「命題の不確実性（蓋然性）」表示と考えることもできる。しかし、仁田(1991:58, 宮崎 1999 : 9)などの指摘するように、「と思う」は独話で使えない（例：*（独り言で）太郎は合格するだろう/と思う）。「蓋然性」は、〈私的所有〉という聞き手の存在を前提とする「と思う」の含意であると考えられる。

参考文献

- 池上嘉彦(2012)「日本語と主観性・主体性」澤田治美編『ひつじ意味論講座 主観性と主体性』ひつじ書房
- 小野正樹(2005)『日本語態度動詞文の情報構造』ひつじ書房
- 砂川有里子(1987)「引用文の構造と機能—引用文の3つの機能について—」『文藝言語研究言語篇』
- 高橋圭介(2003)「引用節を伴う「思う」と「考える」の意味」『言葉と文化』4
- 高橋圭介(2009)「「思う」の多義構造再考—文法化の進んだ「と思う」の位置付けをめぐって—」『研究紀要』50
- 中右実(1979)「モダリティと命題」『英語と日本語と』くろしお出版
- 中右実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 宮崎和人(1999)「モダリティ論から見た「～と思う」」『待兼山論叢』33
- 宮崎和人(2001)「動詞「思う」のモーダルな用法について」『現代日本語研究』8
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞「思う」をめぐって—文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』11(9)
- 湯本久美子(2004)『日英語認知モダリティ論—連続性の視座』くろしお出版
- Langacker, W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.2. Stanford University Press.
- Langacker, W. (2006) Subjectification, grammaticization, and conceptual archetypes. In Athanasiadou, A., Canakis C., Cornillie, B. (eds.) *Subjectification*. Mouton de Gruyter.
- Yokomizo, S. (1998) Believing, Wanting, and Feeling: Three representational modes of embedded propositional contents. 『世界の日本語教育』8